

サン・クロレラが障がい者との協働を始めた理由。

中山 昨年の年始、「多様性の組織への浸透」をコンセプトにこのGlue Crewというプロジェクトをスタートさせました。じつは栗栖さんにお会いする前から多様性については私もずっと考えていました。いま日本でもようやく多様性やダイバーシティという言葉が注目されてきています。しかしなんとなく「少子高齢化に伴うリソース不足の解消」という二次的な目的のほうに注目されている気がしています。私はそもそもマイノリティとかマジョリティとかいう区分け自体がナンセンスだと思っていて、そうした考えかたを社内に浸透させたいという思いがありました。ひとまず3年間という区切りを設けて、そのなかで最終的には障害者雇用をひとつのゴールとして定めています。ただしGlue Crewで達成しようとしているものは必ずしも障がい者ということに限定するのではなく、もっと大きな枠で捉えたときに、これまでの日本社会で「異質」とされてきたものや人々を、そうしたカテゴリにとらわれずに認め合う。そうした大きな価値観の転換のきっかけにしたいという思いがありました。Glue Crewはそういった理念を組織に具体化していくためのプロジェクトとして立ち上がったわけなんです。

栗栖 はじめて中山さんにお会いした時も、いまと同じようなお話をされたんですね。とてもサラッと。でもいまの日本の経営者でこういう考えをお持ちの人ってまだまだ少ない。だから120%共感して「ぜひ一緒にやりましょう!」と。これがファーストインプレッションでした。それで早速、社内にプロジェクトチームを立ち上げていたでいてGlue Crewが誕生して。しかも最初はこちらも「一緒に物作り体験してみよう」とか、初めての人でもどんなものが想像のつきやすいプログラムをいくつかご提案してたんですけど、Glue Crewのメンバーの皆さんから「ぜひサーカスをやり



たい」という回答があって、二重の驚きがありました(笑)。もちろんスローレーベルのイチ押しプログラムですし、心も身体も両方使うとても優れたプログラムではあるんで、お目が高い!と感心するいっぽうで、いきなりハードル高くないかな?という心配ももちろんありました。でも今日実際にやってみて、サーカスでよかったと思えました。やっぱり案ずるより産むが易いです。

中山 Glue Crewはネーミングと最初の立ち上げの掛け声こそ私がやりましたけど、基本的には参加も自主性ですし、そこからのプログラム選びをはじめ、何に取り組むのか?というところからすべてメンバー自身に託してきました。最初は彼ら彼女らも戸惑っていましたが、これも案ずるより産むが易いので、メンバー自身の意識がどんどん変わっていくのを、目を追うことに感じていました。「自分たちが体験して感じたことを社内のみんなにわかってもらいたい」という強い思いが、メンバーのモチベーションを後押ししていたんだと思うんです。そもそも彼らがサーカスを選んだ大きな理由だったんだと思いますね。

栗栖 良依

パラ・クリエイティブプロデューサー/ディレクター、NPO法人スローレーベル代表

アート、デザイン、エンターテインメントの世界を自由な発想で横断し、人や地域を繋げて新しい価値を創造するプロジェクトを展開。2008年より、過疎化の進む地域で住民参加型パフォーマンス作品を制作。2010年、骨肉腫を患ったことがきっかけで、右下肢機能全廃。障害福祉の世界と出会う。2011年より、SLOW LABEL ディレクター。2014年よりヨコハマ・パトリエンナーレ総合ディレクター。2016年にはリオ・パラリンピック旗引き継ぎ式のステージアドバイザーを務める。東京2020総合チームクリエイティブ・ディレクター。



栗栖 そうですよ。たぶん「障がい者」と「サーカス」をやる、という言葉だけを聞いたら「え?何それ?ムリムリ」ってなると思う。でも実際にやってみると一緒にスポーツやるよりもむしろハードルは低いんですよ。身体能力が高くない人やふだん運動してない人、あるいは人とコミュニケーション取るのが苦手な人でも、誰でも入りやすいものです。でもそこがなかなか伝わりにくいで、見てもらったり体験しちゃうのがやっぱりいちばん早いんですよね。それにしても参加者もすごく多くて、それもまたびっくりでした。

ワークショップがもたらしたポジティブな空気。

中山 私も参加者リストを見せてもらったときの感想が「予想よりたくさん参加してくれるんだな」ということでした。栗栖さんの講演を聞きたいという人はたくさんいるだろうけど、まさかこれほど多くの社員が自主的にサーカスに参加してくれるとは思ってなかった。第1弾としてはじゅうぶん成功だったし、メンバーが1年かけて社内に発信してきたことが、浸透してきつつあるという手応えを感じました。何よりサーカスを終えて戻ってきた社員たちの声のボリュームがふだんの3倍くらい大きくて(笑)。

栗栖 やっぱ心が開いちゃっているんですよ。オープンでポジティブなマインドになれている。

中山 そうなんです。とてもポジティブな体験が、社員たちの心を解放してくれているんだと感じました。そういう自己肯定感に包まれて社内で過ごすのと、つねに仕事に追われるストレスやプレッシャーを感じているのでは、やっぱり成果も違うと思うんです。彼ら彼女らの快活な声を聞いて「やってよかった」という確信が持てました。

栗栖 日本人ってどうしても人の顔色を伺って、つねにその場の正解を探っている。怒らせちゃいけない、困らせちゃいけない、失敗しちゃういけない。ずっとそればかり考えるから心も身体も縮こまって、それが見えないストレスになっていると思うんです。でも、

サーカスははじめ私たちのワークショップのプログラムでやることって、まずそもそも正解がない。失敗するのが当たり前で、みんな失敗しまくるし、誰かが失敗したらフォローしまくる。しかもそれがみんなの笑いに変わったりする。失敗というネガティブなものが笑顔っていうポジティブなものにひっくり返っていく体験。最初はみんなやっぱりすごく驚かれますね。

チームが個人を輝かせ、優しさが組織を強くする。

中山 私は子どものころから海外で生活することも多かったんで、ちょっと引いた視点で日本を見ているところがあって、やっぱりみんなが同じじゃないといけないという感覚が強すぎる気がするんです。でもこれは急にマインドをリセットすることは難しい。そこで、いろんな個性を持った人となにかと一緒にやってみること

によって、いろんな気づきが生まれ、自ら考えるっていう習慣がもっとも組織の中で根付いていくんじゃないか。そしてそれが達成できれば、おそらくひとりひとりのパフォーマンスも上がっていくと思うんです。実際にGlue Crewのメンバーもこの1年ですごく変わりました。積極的に自分で考えてアクションを取ってくれていて、いまはもう私は彼らからの事後報告を聞くだけです。

栗栖 そうそう。本当にこのプログラムって組織論とかマネジメントにも大いに役立つことがあるとよくおっしゃっていただきます。たとえば「アクセスコーディネーター」「アカンパニスト」という肩書きの人たちがいます。伴奏者って呼んでもらいます。

中山 具体的に現場でどのようなことをされていらっしゃるんですか?

栗栖 アクセスコーディネーターは看護師の資格を持っていたり、福祉に関する知識も有する人たち。ワークショップで突然発作を起こしたり、体調悪くなった場合に、ケアしてくれるスタッフのことです。こういう人たちがいるということでご本人はもちろん障がいのある方のご家族がすごく安心して参加できるようになったと伺っています。また、アカンパニストは、障害の種類や度合いなどを見極めて、そのケアをしながら、演出家が考える舞台のなかでひとりひとりがどういうパフォーマンスが可能かを、障がい者と共に演出家に伝えているんです。たとえばもし舞台演出家にそれぞれの出演者の障害を詳細に知らせてしまうと、やっぱりちょっと遠慮してしまいますよね。「ここまでやらせるのは酷かな」とか「これは危険なんじゃないか」とか。そうなるとう演出家が本来めざすべきであるクオリティが高い舞台の制作という目的から遠ざかってしまいますから。

中山 なるほど。たしかにそうですね。

栗栖 ですから、うちの場合は金井ケイスケさんみたいな優れた演出家やパフォーマーさんには遠慮なくガンガン前へ進めてもらう。それでもしついでいのが難しくなった人たちが出てきたら、アクセスコーディ

ネーターやアカンパニストが個別にフォローしていくという仕組みになっています。

中山 なるほど。ひとつの視点ではなくて複数の視点から見ることで、安全な環境と円滑な進行や舞台の質を追求する作業をチームでやっていっちゃるということですね。それは本当に会社運営の面でもすごく参考になります。

栗栖 ええ。内輪の発表会や学会のように、ただみんなで楽しくやればそれで満足ということであれば、演出家もそこまで高い質のものを追求しないし、アクセスコーディネーターやアカンパニストも必要ないと思います。でも私たちは高いクオリティの舞台を作りあげて、障がい者やマイノリティに対する一般の人々の価値観をひっくり返したい、というミッションを掲げているわけです。

中山 それこそ障がいのある方たちだって、より質の高いパフォーマンスをやり逃げたいという気持ちは、あたりまえにお持ちですもんね。

栗栖 そうなんです。そこは彼ら彼女らにとって、あるいはそのご家族にとっても非常に大きなチャレン

ジ。当然それだけハードルの高いチャレンジにはなりますし、アクセスコーディネーターやアカンパニストなど私たちスタッフ含めて全員にとってチャレンジになるんです。しかしそのチャレンジをすることによってその人の限界を超えていくことが達成感とか自己肯定にもつながっていくわけです。本

人も「こんなすごいことができた!」と自信になるし、親御さんも「こんな表情を見たのは初めて!」と喜んでもらえる。だからこそ私たちスローレーベルはつねになかになりにチャレンジしていくっていう姿勢をもって取り組んでいます。

中山 チャレンジして成功したときの達成感、健常者・障がい者に関係なく、人間が誰でも持っている喜びですもんね。

栗栖 はい。やっぱり医療や福祉、学校の現場だとどうしても安心安全という方向に偏りがちなので、そこにあえてわれわれはチームの力でチャレンジすることをめざしているんです。

2020年を一緒に新たな時代の始まりにしたい。

中山 いま栗栖さんがお話しされた内容は、たくさんのヒントや示唆があると感じています。実際にこの1年間、スローレーベルさんとの活動を通じて、Glue Crewのメンバーはもちろん、ワークショップに参加した社員、講演を聞いた社員など、コミットの度合いにこそ差はありますが、それぞれに絶対になんらかの気づきはあったと思うんです。だからそれをひとりひとりがどういにかたちで吸収して、今後の行動にどのように活か

中山 太

サン・クロレラ
代表取締役社長



していくかというところをすごく見たいし、とても楽しみにしています。

栗栖 私も今日のイベントを経てどう変わるのかがすごく気になっています。というのも、さっきも話したようにそもそも最初の1年目にサーカスを選ぶと思っていなかったというのがあるから(笑)。なので私が当初考えていた3カ年計画はしょぼなから崩れているのですよ。もちろん良い意味で。だからこそ逆に来年以降みなさんがどう考えてどう動かれるのかっていうのがとっても興味があります。いつもだったら私の方が企画とかアイデアをバンバン提案していくスタイルなんですけど、今回はみなさんから投げられたボールに返していくっていう形になっているので、私にとってもほとんど初めての試み。さて次年度はどんな球がどんなふうに乗んでくるのか?それがとっても楽しみです。またそれを3年間続けていくとはたしてこの会社はどこへ向かっていくんだろう?っていうのもすごく興味があります!

中山 そういっていただけると、こちらとしてもすごくうれしいです。

栗栖 今年はうちにとっても勝負の年。5月に3年ぶりの新作の公演があり、70人くらいの市民が参加する野外サーカス作品を発表します。2020東京大会の開閉会式もありますし、11月にはヨコハマ・パトリエンナーレの最終章も控えている。その舞台には、みなさんがサーカスで身体を一緒に動かした障がいのある方たちも立つ予定なので、同じチームメンバーという気持ちで、ぜひみなんで応援に来てほしいです。

中山 本日はありがとうございました。今後も引き続きよろしく願います。

